

## 編集後記

経済低成長、総需要抑制、地方財政危機と近來にない不況にみまわれ、昨年産ぶ声をあげた県史編纂事業もなかなか成長しない現状にある。

しかし修史事業は一朝一夕にして成るものではなく、特に本県の場合、藩史の体系的研究がほとんど進展していない現状にかんがみ、当会として藩史特集を計画することによって会員各位の研究心の触発、あるいはこの趣旨に賛同する研究者の研究発表を蓄積して有事に備えようとするものである。

本号は論説六編、史料紹介一、参考資料一をもって構成した。高原氏のもとは、各界の注目をあつめた著書「大分の神々」の続編ともいふべき性格のもので、身近かにありながらついで見すごされて来た鳥居についての論説で藩政と宗教のかかわり合いを知る貴重なものである。野口氏のもとは県地方史六八、七〇、七一号に発表した論説を更に進展させたもので、困窮する農民あるいは農村社会の変化を解明したもので、次回の発表が楽しみである。神崎氏は出身地であり勤務地である郷土について論及したもので、特に肥後領特有の諸問題を学界未見史料を中心にまとめたものであり、また渡辺氏も今まで研究対象としてあまり取り上げられなかつた時枝領について新史料をもとにその支配構造にふれたもので、共に今後の発展を期待したいものである。

中山氏の論説は、宗教史、古代史の面で重大な意味をもつた宇佐宮を、江戸時代藩領の中にあつていかに神宮がその権威を守つ

ていったかについて逐一解明した注目すべきものである。高倉氏の論説は、九州にあつて、諸大名を統括する日田代官の定着過程の概要を論及したもので、氏のライフワークの一端をうかがえる貴重なものである。赤峯氏の史料紹介は参勤交代における旅程、経費等を知る上で貴重なものである。

最後に、二豊大名の変遷状況と各藩の出自と系譜を収め参考資料とした。

いずれの論説も藩史研究にふさわしい雄編で、共に今後の発展が楽しみなものばかりである。本号を藩史特集号第一輯としての性格付けを充分満足させるもので、編集者としても今後逐次号が重ねられることを念願する次第である。

(橋本)

昭和五十一年一月一日印刷

昭和五十一年一月一日発行

大分県地方史第八〇号

発行人 渡辺 澄夫

編集人 橋本 操 六

印刷人 高井 久雄

大分市上野町七ノ二五

印刷所 三恵印刷株式会社

電話 〇二二三番

大分市且ノ原七〇〇七八七〇一一

大分大学教育学部国史研究室内

発行所 大分県地方史研究会

(振替下関五二九四番)